二〇二五年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

（二回）

国語

注意事項

一．合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。

二．問題は一から二、2ページから20ページまであります。
合図があったら確認してください。

三．解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一

次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

（ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。）

著作権保護の観点から、公開していません。

著作権保護の観点から、公開していません。

著作権保護の観点から、公開していません。

（『食べものから学ぶ現代社会――私たちを動かす資本主義のカラクリ』　平賀（ひらが）　緑（みどり））

（注）

＊1　相場――商品が取引される、その時その時の値段。

＊2　値動き――価格の変動のこと。

＊3　証券取引――証券を売買すること。証券とは、国や企業（きぎょう）が資金を調達するために発行する債券（さいけん）や株などのこと。

＊4　ディーラー――証券を売買する人のこと。

著作権保護の観点から、公開していません。

＊5　ローソク足とかチャート――値動きや相場の様子を示したもの。
＊6　指数先物取引――未来の値動きの数値を予想して、先に売買を済ませておく取引のこと。

問一　―線A「キショウ」、B「ドウコウ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。
（一画一画ていねいにはっきりと書くこと。）

問二　―線①「興味深く考えた」とありますが、どのようなことを考えたのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　食品産業や農業が提供するものの消費は日常的なものが多いと思っていたが、「不要不急」の抑制を受けて初めて、外食産業が占める部分が多かったと気づき、意外だと考えた。
イ　筆者の生活には欠かせないと思い込んでいた外食やグルメ産業が感染症の拡大を防ぐために「不要不急」だと規制されたものの、思ったよりも不自由ではないのだと考えた。
ウ　新型コロナウイルスの流行がニュースで取り上げられ、それまで当たり前のように楽しんでいた外食が「不要不急」であると人々からの批判を受け始めたことが残念だと考えた。
エ　「不要不急」を抑制する風潮が宴会系の飲食店の営業に打撃を与えた一方で、売り上げを伸ばした業種もあるという理不尽ともいえる状況に、学生たちが不満を持つだろうと考えた。
オ　人間にとって「食事」というものは不可欠なものであって食品を捨てるなど本来許されない行為なのに、まだ食べられるはずの食品を捨てる行為はとんでもないことだと考えた。

問三　―線②「1990年代にコンビニがそれを広めた」とありますが、その背景の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　地域限定の食文化だった恵方巻を全国の人に宣伝して地方の伝統的な食文化を大切にする意識を根づかせれば、全国ご当地グルメフェアなどでの後発商品が売れると期待できるため。

イ　店舗数が多く営業時間も長いコンビニで販売すれば、節分の日にしか需要のない恵方巻であっても売り上げが見込めると戦略的に判断し、主要な商品として採用したため。

ウ　弱肉強食の経済社会では、自分の店は他と比べて特別だと示して消費者に選ばれる必要がある中、知名度の低い恵方巻は新規性が高く独自の取り組みとして売り出しやすかったため。

エ　節分には恵方巻を食べて当たり前だという流行を作り、「せっかくだし食べたい！」と望む心を刺激すれば、買い物をしてもらう機会が必然的に増えると考えたため。

オ　クリスマスとケーキ、お正月とお節などのような、その行事に欠かせない食品として、恵方巻が節分にふさわしいという新たな選択肢を紹介して人々の食文化を豊かにするため。

問四　―線③「日常的な消費財である食品」とありますが、その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　どんな人がいつ来店しても需要を満たせるように、市場調査を通して開発された食品。

イ　毎日の忙しい社会生活に追われた消費者が、手軽に手に入れることができる食品。

ウ　季節性の強い商品に限らず、不特定多数の消費者が毎日買うことを前提とする食品。

エ　食品添加物を多く使うことで生産コストが抑えられ、安価で手に入れやすい食品。

オ　売れ残って食品ロスとなることを防ぐため、消費者に人気のものだけを厳選した食品。

問五　―線④「兵器」とありますが、この語を用いて説明される「砂糖と油脂と塩」はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　コロナの影響により停滞する食品産業を市場経済の中で復活させるための道具。
イ　必要以上に食べさせて消費者の身体を壊すほどに、菓子類に依存させるための道具。
ウ　商品を選ぶ立場として優位に立つ消費者へ、販売側が対抗するための道具。
エ　生産にかかるコストを抑え、食品を生産する農業従事者を救うための道具。
オ　消費者の食欲を刺激し、同業他社より利益を得る経営戦略のための道具。

問六　資本主義経済における企業側の目的と戦略を五十字以内で説明しなさい。

問七　空らん〔　⑤　〕に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　だがしかし　　イ　だからこそ　　ウ　意外にも
エ　なぜならば　　オ　ひどいことに

問八　―線⑥「金融取引はマネーゲーム」とありますが、ここでいう「マネーゲーム」の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　子どもでも遊べるおもちゃと同じく、誰でも簡単に素早くお金が稼げる装置。
イ　依存性が高く、のめりこむと人間を強欲な性格に変えてしまう危険な遊び。
ウ　形を持たない情報を頼りにしながら工夫して儲けを目指す投資家たちのかけひき。
エ　現実の世界での操作から切り離されて想像の中でのみ行われる気軽なやり取り。
オ　物質としての金ではなく、紙や鉄などでできたものをお金として扱うもの。

問九　本文全体の内容を説明した文章として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　身近な例を用いて消費者の需要が刺激されてモノが買われていく様子を説明し、企業側の立場からその理由を分析しつつ、お金を出して消費するモノだった食品がまるでお金そのもののように市場で取引されているのが現代の経済社会であると述べている。

イ　アルバイトや季節のイベントを例に挙げて身近な消費生活を列挙し、日本の今までの外交史に沿って近代の大量消費社会を説明し、このような近代資本主義の欠陥として、実際にモノが存在しないにもかかわらずゲーム感覚で金銭の取引をする様子に触れている。

ウ　恵方巻などの身近なイベント食の例を挙げながら、大量に生産して大量に売りつけ利益だけを追求するという近代資本主義社会の問題点を明らかにすることで、取引価格の急な変化に振り回される市場の混乱がおさまり物価高も元に戻るだろうと述べている。

エ　モノを売ったり買ったりする日常的な経済生活は、消費者の需要により左右されると見せかけながらも生産者の都合が優先されると述べ、本来売り買いの対象であるはずのモノにお金と同様の価値を持たせた現在の市場が、生産者を優遇しすぎている点に触れている。

オ　日常的に売り買いする食品は、過剰に需要を刺激されたもので、消費者は企業に不要不急の購買をさせられているものだと批判する一方で、近代資本主義社会ではモノを売るのが難しいため、現実のモノを持たない金銭の取引が積極的に行われていると述べている。

三　次の文章を読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。

（ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。）

塾の一時間目は村田先生の授業だった。

（中略）

「石油は、プランクトンなど大昔の生き物からできたものです」

うなずきながら、あたしは石油のこと、石油から作られる灯油のことをぼんやりと考えはじめる。

寒いときはエアコンではなく、ファンヒーターでもなく、ガラスのほやがついた石油ストーブにあたたまるのがいいな。

火がついたばかりの匂いもいいし、女王様のティアラみたいに燃える火はとてもきれいだもの。

α窓から見える空には雨雲が広がっていく。

あたしの空想も広がっていく。

そうなんだ、生き物は石炭になったり石油になったりするんだ。

おばちゃんの家のマグノリアの木は石炭になり、猫のムンクは石油になる。

遠くでかみなりの音がかすかにきこえた。

そしてあたしは……あたしも虹色にかがやく石油になる。

石油は透明な灯油になり、どこかの家に運ばれる。どこかの家であたしはブルーとオレンジの輪っかになってちらちら燃える。

するとだれかがあたしの前で手をかざす。そして紅茶をのんだり、おしゃべりしたり、ほかほかとあたたまっては幸せな気分になるんだ。

あたしはいつか石油になりたい。そうすれば、あたしがいたことにも意味ができるもの。

b遠くの空で稲妻が光っていた。

塾の帰り、ぽつぽつと小雨が降りはじめた。あたしたちはかばんを頭の上にかざしてバス停まで走っていった。

塾からは市内をまわる循環バスで帰る。家までは歩ける距離なのだけれど、帰りだけはみんなと同じバスを使っていた。あたしのほかに五人の女子が同じバスにのる。あたしがおりるのは家に近い五丁目のバス停ではなく、ひとつ先、きいちゃんと千夏の家に近い六丁目のバス停だ。六丁目のバス停前には大型スーパーがあって、そこであたしたちは雑誌を立ち読みしたり、ジュースをのんだりする。

凛さんだけがひとつ手前、五丁目のバス停でひとりでおりる。

雨が降りはじめたバスの中は混雑していた。

大きくバスがゆれると、千夏が凛さんのほうへだれかを押す。押された人は足をふんばる……拒食症ごっこ。凛さん自身もそのゲームに参加しておもしろがっているようだ。やせていることを自分のウリにするのもひとつの手。ときにはそれでわらいもとれる。それくらいはいくらマイペースな子でも学習する。

凛さんが細い腕をのばすと、みんながバリアをつくる。タッチされてもまただれかにタッチしてまわせばセーフ、拒食症の伝染はまぬがれる。

c稲妻が窓ガラスの中をキリキリと走った。

あたしは外をながめた。暗くなったガラスに凛さんのすがたがぼやけてうつっていた。窓の中で彼女はまっすぐに立っている。

①倒れないよう両足を広げて。

凛さんならぎりぎりまで倒れないだろうな。それでももちこたえられないときは、立った姿勢のままで倒れちゃうんだ。きっと、前に向かって。

d水滴が、ちいさいヘビみたいにガラスの上をジグザグにすべっていく。
こちらを見ていた凛さんと窓の中で視線が合った。
ほんとうはあたしではなく、ガラスの向こうの何かを見ていただけなのかもしれない。でも、凛さんの目は静かにあたしを透かしていた。すると②あたしの心がちぢんでいく。ソーダ水みたいにシャワシャワとかすかな音をたてて。
かみなりの音がきこえる。
もうすぐ家の近く、凛さんがおりる五丁目のバス停。そのつぎがみんながおりる六丁目のバス停。
凛さんは強いから平気でいられる。どうせ子どもっぽいばかげたゲームだとわりきっているんだ。そう考えていたときはしゃいだ声がきこえ、千夏の手が腕にふれた。タッチがあたしにきたのだ。
ゲームを続けなきゃ。すぐにだれかにまわさなきゃ。まよっていると車内が一瞬、かみなりの閃光につつまれた。
eつづいてドーンと音がした。
青白い光にさらされた光景はストロボライトをあびたみたいにうかびあがり、一瞬、時がとまったように見えた。あわてて外に目をやった。しかしガラス窓は外の景色ではなく、鏡のようにはっきりと車内をうつしだしていた。あたしは目を見ひらいた。
千夏もきいちゃんもほかの人もバスの窓にはうつっていない。凛さんとあたしだけが、③ガラスの中の世界にいた。
ふたりだけのバスは寒々としていた。エンジンの音も車内のさわがしさも耳から遠ざかった。音のない世界の中で、窓にうつった凛さんは平気な顔などしていなかった。
凛さんは泣いていた。
細い手であたしにすがりつき、しきりに何かを言いながら凛さんは泣きじゃくっていた。涙がめがねの下からほおをつたって落ち、きゃしゃなあごの先にぽたぽたとしずくとなって光っている。しゃくりあげるたびに薄い肩が大きく動く。
そして、あたしはそんな凛さんの腕をふりはらっている。目をつりあげ、口をきつくむすんで、すがりつく凛さんをつきはなし

ているのだ。
あたしにもほんとうはわかっていた。人間は石油になんてなれない。たとえ、なれたとしたってだめなんだ。死んだあとにだれかをあたためたからって、今していることがチャラになんてならない。生まれてきた意味なんて、自分で見つけなきゃずるいんだ。
バスのエンジン音がもどった。車内のさわがしさがいっぺんに耳に押し寄せてくる。
窓の中にはそのままの車内がもどっていた。泣いた凛さんも、いじわるなあたしも、ガラス窓の中から消えていた。鏡に思えた窓は、ただのくもったガラスでしかなかった。
「かみなり、ちょう近くなかった？」「まじ、びびったよねぇー」みんなはひとしきりさわいだあとに、またもとのゲームにもどった。「灯子の番だよ」千夏がそう言ってあたしを見た。あたしがだれかにタッチするのをまっている。
バスの中は息ぐるしかった。もうおりたいと思った。みんながおりるバス停でなく、あたしのほんとうのバス停で。
そうしないと④もう二度とおりられないような気がした。たとえ大人になっても、十二歳のあたしはこの循環バスに残り、夕闇の町の中を永遠にぐるぐるまわり続けるんじゃないかって気がした。
あたしはタッチされた手をバスの停車ボタンにのばした。
みんなが顔を見合わせる。ボタンは遠くにあった。手が届かない、⑤まっ暗な宇宙のはてにあるくらい遠くに思えた。
バスはカーブにさしかかり、そこから先の道はふた手に分かれている。
ボタンに指がふれた。
思いきってぐっと押した。⑥赤い星のように停車ランプはかがやいた。
――つぎ、とまります。
無機質な声が車内にひびく。カーブのゆれで、つり革につかまっていたみんなが安っぽいあやつり人形のようにそろってグラリとよろめいた。

あたしは足をふんばった。前の道をぐっとにらみ、⑦倒れないよう必死で足をふんばった。
凛さんはまっすぐに立っている。そのうしろ、五丁目のバス停のあかりが薄闇の中にうかんで見えた。
小さな声だったけれど、あたしはみんなに向かって言った。
「あたし、今日はここでおりるから」
それから凛さんに顔を向けた。
「凛さん、あの、とちゅうまでいっしょに帰らないかな」
みんなはポカンと口をあけ、凛さんはびっくりしたようにこっちを見つめている。
バスはとまった。
あたしはゆっくりとステップをおり、凛さんがあとに続いた。ほかの乗客もそのあとにおりてくる。おりた順のまま、凛さんはあたしのあとを歩く。そして、うしろから傘をさしかけてくれた。でも、傘は重いのかどんどん角度を下げていき、あたしの頭にかぶさり、とうとう顔のまん前をかんぜんにふさいでしまった。
あたしはふりかえって言った。
「傘、ありがと。でも、前がぜんぜん見えないんですけど」
「うん、わざと」めがねの奥の目がじっと見つめた。「さっきの仕返し」
「え、さっきって」思わずきき返した。「仕返しって？」
凛さんははっとしたような顔をした。それからゆっくりと首をかたむけた。
「なんだろ。なんだか、一瞬そんな気がしたんだけど……わかんない。ごめん」
ガラス窓の中に凛さんもあたしと同じものを見たのだろうか。
「ほんと、どうしちゃったんだろう」と言いながら、凛さんは髪をぼりぼりとかきはじめた。そのひょうしにめがねがずり下がっ

た。

そんな⑧間のぬけた凛さんのすがたを見たのははじめてだった。あたしはふきだしたいのをがまんして、傘の柄をつかむとまっすぐに立てなおしてやった。

凛さんはあわててめがねを直した。それから照れたように少しわらった。

切れ長の目は、わらうとまつげが下向きになるのをはじめて知った。

雨がやんでいるのに気づいたけれど、傘をたたまないでいた。傘の中にやどったもの、「　　⑨　　」をそのままにしておきたかった。

ふたり並んで傘をさし、雨のあがった町を歩きはじめた。

バスは時間調整を終えて発車した。ふりむくと窓の向こうにみんなの顔があった。

千夏がこちらを向いているのがわかった。車内灯のせいか千夏の顔はひどく青白く見えた。

（『夕暮れのマグノリア』　安東　みきえ　）

（注）

＊　無機質な――生命活動とは無関係な、生物的な特性を持たないもの。感情の欠如した状態。

問一　―線①「倒れないよう両足を広げて」、―線⑦「倒れないよう必死で足をふんばった」とありますが、この二カ所の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　①は意地でも人には頼るまいという凛さんの気持ちの表れで、⑦は凛さんのように強い人になりたいと思っている「あたし」の気持ちの表れ。

イ　①はつらいことを一人で抱え込む凛さんの気持ちの表れで、⑦はつらいことを初めて乗り越えようとしている「あたし」の気持ちの表れ。

ウ　①は周囲から避けられないように自己防衛する凛さんの気持ちの表れで、⑦は周りからの非難は受けまいとする「あたし」の気持ちの表れ。

エ　①はつらさを誰とも共有できず孤独にたえている凛さんの気持ちの表れで、⑦は自分の意志を貫こうとしている「あたし」の気持ちの表れ。

オ　①は寂しさを必死にこらえている凛さんの気持ちの表れで、⑦は今後仲間から離れる寂しさを覚悟している「あたし」の気持ちの表れ。

問二　―線②「あたしの心がちぢんでいく」とありますが、この時の「あたし」の感情の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　凛さんが「あたし」のことを責めているので、居心地の悪さを感じている。

イ　凛さんの泣き顔が「あたし」に助けを求めているようで、心苦しさを感じている。

ウ　凛さんの「あたし」に対するまなざしを意識して、うしろめたさを感じている。

エ　凛さんが笑顔なのに「あたし」をにらんでいるようで、恐ろしさを感じている。

オ　凛さんが外を見るふりをして「あたし」を見ているので、こわさを感じている。

問三　―線③「ガラスの中の世界」とありますが、どのような世界ですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　凛さんは決して本心を明かすつもりはないけれど、実は凛さんが抱えている様々な苦悩を映し出している世界。

イ　「あたし」は目をそむけたいけれど、本当はこれが事実なのではないかと「あたし」自身が思っている世界。

ウ　「あたし」はまだ変わりきれていないけれど、自信を持って事実とは異なる光景だと言い切ることのできる世界。

エ　「あたし」は理想に近づこうとしているけれど、実際にたどり着くのは難しいということを表している世界。

オ　凛さんは現実から逃げ出したいと思っているけれど、その向き合わなければならない現実が映し出された世界。

問四　―線④「もう二度とおりられないような気がした」とありますが、その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　物事をゲーム感覚で捉える不誠実な人になってしまうような気がした。

イ　すぐに周囲に同調する優柔不断な人になってしまうような気がした。

ウ　自分の心に従って判断することができない人になってしまうような気がした。

エ　一生、他者からきらわれ続けて過ごすことになってしまうような気がした。

オ　他者の言いなりになる生き方から抜け出せなくなってしまうような気がした。

問五　―線⑤「まっ暗な宇宙のはてにあるくらい遠くに思えた」とありますが、この時の「あたし」の感情の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　友人たちとは別の、凛さんと同じバス停で降りる決断をするにはとても勇気が必要だった。
イ　自分で判断して行動できたことで、遠いと思っていた大人の世界に近づいたような気がした。
ウ　自分がいくらゲームを抜け出そうとしても皆が妨害し、抜け出せないことに悔しさを感じた。
エ　自分が何をしようとしているのかわからなくなり、闇の中にいるようで不安でいっぱいだった。
オ　皆の輪の中に割って入って手を伸ばすことは、友人たちの邪魔になるのでためらわれた。

問六　―線⑥「赤い星のように停車ランプはかがやいた」とありますが、この表現はどのようなことを暗示していますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「あたし」が仲間から抜けたことで起こるもめごとに対する警告を暗示している。
イ　「あたし」自身迷いながらも正しい行動がとれたことへの達成感を暗示している。
ウ　今後友達の「あたし」への扱いが悪くなることを知らせる赤信号を暗示している。
エ　「あたし」の良い行動により友達も優しくなっていくという予兆を暗示している。
オ　正しいことができた輝かしい「あたし」に対する一般客からの称賛を暗示している。

問七　―線⑧「間のぬけた凛さんのすがたを見たのははじめてだった」とありますが、凛さんの姿は「あたし」の目からどのように見えたのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　常に自分を抑えて我慢してきた凛さんが、自分の感情をストレートに激しくぶつけることができているように見えた。
イ　いつも気を張って周囲の人たちに本心を隠してきた凛さんが、気を許して自分の心を表現できているように見えた。
ウ　何事も自立して対処してきた凛さんが、時には人に頼るほうがうまくいくということに気づきはじめたように見えた。

エ　周囲の人たちから逃げて一人でいようとしていた凛さんが、緊張から解き放たれて人とかかわっているように見えた。
オ　本当は辛いのに自分を笑いの対象にして場をやりすごしていた凛さんが、笑われるのを拒んでいるように見えた。

問八　本文の構成について、後の各問いに答えなさい。

（ⅰ）本文の展開をたどっていくと、場面が大きく変化するのはどこですか。その部分の描写として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　―線a「窓から見える空には雨雲が広がっていく」
イ　―線b「遠くの空で稲妻が光っていた」
ウ　―線c「稲妻が窓ガラスの中をキリキリと走った」
エ　―線d「水滴が、ちいさいヘビみたいにガラスの上をジグザグにすべっていく」
オ　―線e「つづいてドーンと音がした」

（ⅱ）（ⅰ）で解答した部分の描写の後の場面展開でどのような変化があったのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「あたし」がふとした時に憂鬱な気分に陥り、その後急に感情が高ぶるようになった。
イ　「あたし」が客観的な視点を持てるようになり、物事の理解力が深まるようになった。
ウ　「あたし」が日常の中で我に返り、自分の利害を最優先に考えて行動するようになった。
エ　「あたし」が現実世界の醜さを知り、そこから逃避して理想を追いかけるようになった。
オ　「あたし」が自分の実情に気づいて衝撃を受け、誠実に自身に向き合うようになった。

問九　本文の展開をふまえ、空らん〔　⑨　〕に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　やさしくあたたかいもの　　イ　ふかくしっとりしたもの　　ウ　まるくぼんやりしたもの

エ　あまくせつないもの　　オ　かるくはじけたもの

問十　二重線「あたしはいつか石油になりたい。そうすれば、あたしがいたことにも意味ができるもの」とありますが、「あたし」は後でどのようなことに気づきましたか。「石油になりたい」とはどのようなことかをふまえた上で、六十字以内でまとめなさい。